

【資料2】

令和元年度 伊万里市立伊万里小学校 学校評価結果

<p>1 学校教育目標</p> <p>◎校訓 心ゆたかに 健やかに 「であう ふれあう 学びあう」 『響け！ 伊万里小』 ・「楽しい学校を、みんなで創ろう」 －『地域中の学校づくり・コミュニティースクール伊万里小版 ・地域貢献度の向上（地域を愛し、誇りに思ふ心の醸成） ・確かな学力の向上（キャリア教育につながる学力の醸成）</p>
--



<p>2 学校経営ビジョン</p> <p>【5つの基本目標】…「知・徳・体・活・公」 『知』－であい、問ひかけ、学び続ける子 『活』－ふれあひ、ふかめ、実践する子</p> <p>－『響け！ 伊万里っ子』－ 『徳』－よさを認め、学びあう子 『公』－地域に学び、かかわる子</p> <p>『体』－すこやかに、心と体を育む子</p>



<p>3 本年度の重点目標</p> <p>1 確かな学力を身につけた子どもの育成 ① 朝の時間の充実 ② 基礎・基本を培うスキルタイム・短時間学習「伊万里っ子タイム」・個別指導の時間を設定 ③ 国語科・算数科を中心に確かな学力の育成 ④ 基本的学習習慣の確立 2 温かい心を大切にす豊かな子どもの育成 ① 伊万里小生活のめあて「かきくけ」の徹底 ② 「早ね・早おき・朝ごはん」の習慣化と保護者への啓発 ③ 「思いやりのあるやさしいことばかけ」のできる子どもの育成 ④ 「歌声のひびく」学校の創造 3 道徳教育の充実 ① 考え、議論する道徳教育への転換 ② 道徳科の評価に関する研修 ③ 心に響く道徳の推進 4 特別活動の充実 ① 登壇しい種別活動を推進（学級づくり） ② 学校行事、集団の中で協力する心の育成</p>	<p>4 前年度の成果と課題</p> <p>○基礎的・基本的な学力の定着に向けた取組については、「伊万里っ子タイム」、「家庭学習」に重点を置き、全校的に統一した取組を進めてきた。 ○児童の体力づくりについては、昼休みの外遊び、校内の各種大会の設定、校外行事への参加など、計画的に取り組むことができた。 ○育友会との連携について、本年度の重点は、「挨拶の励行」だった。挨拶については、啓成中学校区3校の取組みとして、毎月第3週を「挨拶運動の週間」に設定し、児童玄関に児童と保護者が立ち、挨拶運動を行ってきた。児童の挨拶の声が少しずつ大きくなってきた。今後は地域の方への挨拶も指導していく。 ○コーラス部の活動の充実を図り、さわやかな歌声が響く学校づくりを行っている。各種大会や地域の行事にも積極的に参加している。 △不登校傾向児童の早期把握と全体での共通理解に努め、家庭や地域、専門機関と連携してその解消に努めてきた。しかし、結果的には、不登校傾向児童には至っていない。全職員で取り組んでいく。 △学校間での交通量が年々増加している。安全指導について具体的な指導を重ね、安全な登下校や休日の過ごし方、自転車の乗り方など安全意識を高めていく必要がある。 △「語の日」「家読」「ノーテレビ・ノーゲーム」などの取り組みについては、まだ十分とは言えない。育友会との連携を深めて、より実効性のある手立てを検討していく必要がある。</p>
--	--



5 総括表

① 基礎学力の定着及び活学力の向上に努める。						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	◎特色ある学校づくり	・楽しい学校を、みんなで創る ・頑張った人が、褒められ、認められる学校を創る	・「あいさつ、歌声、音読、元気な声」が響く学校を創るよう職員・児童の意識を高める。 ・校内研究との連携を図り、思いやりのある学級集団づくりに努める。	・「七つの誓い」を全児童が意識し、目標を到達できるよう全職員で指導にあたる。 ・各担任が、Q-Uアンケート等を活用し、学級の実態を把握し、あたたかい思いやりのある学級集団づくりを行う。 ・学校だよりや学年・学級懇談会等で保護者にもその取り組みを周知し、保護者への啓発と地域社会との連携を図る。	・事あるごとに、「楽しい学校をみんなで創ろう」「頑張った人が褒められ、認められる学校を創ろう」(「七つの誓いも含む」)についてできているかを振り返り時間をとることで、全児童、全職員が意識しながら学校生活を送ることができた。 ・全校朝会で表彰を全行ったことで、子供達の自信や意欲付けたくなった。 ・今年度は、Q-Uアンケートとはならなかった。担任等の観察や生活アンケート等で学級の実態の把握を行い、指導を行うことで、互いに認めあう学級集団づくりに活かすことができた。 ・「学校だより」や「学年だより」「学級だより」等の発行や、「学校HP」で、学校としての取り組みを保護者や地域に発信することができた。	○全校朝会や全校放送等で、「楽しい学校をみんなで創ろう」「頑張った人が褒められ、認められる学校を創ろう」(「七つの誓いも含む」)の話を出し、振り返らせることで、落ちついた学校生活を送れる児童が増えた。しかし、心ない言葉で人を傷つけたり、いやがごとししたりする児童も一部見られた。 ○事業が起きた時に、その場合ったアンケートを実施し、児童個々の実態を把握した上で、その個に合った指導・支援を行うことで、児童のよりよい学習につながることが多かった。 ○△事業での学習については、「家庭学習のてびき」を各家庭に配布したり、「宿題提出調べ」をおこなったりすることで、児童及び保護者の家庭学習に対する意識が高まってきた。しかし、各家庭での取組については、まだ、温度差が大きい。
教育活動	●志を高める教育	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちをもつ教育活動の推進	・全校児童が地域とつながる行事に参加する。	・地域の教育資源や人材を活用した教育活動(体験活動)を実施したり、地域とつながるプロジェクトを実施したりする。	・「[ドントントン祭り]を盛り上げよう」ということで、全学年が何らかの形で参加し、地域を愛し誇りに思ふ心を醸成する活動ができた。	△地域人材リストを作成したが、あまり活用とまでは至っていない。 ○保護者や地域の方、商店街の方、老人会等の協力を得ながら、各学年に応じて祭りを盛り上げるための取り組みを行った。子供たちも生き生きと取り組んだ。来年度も継続していく。
教育活動	●学力の向上 ○活学力(思考力、判断力、表現力)の向上 ○授業と家庭学習とのつながり ○国語科の充実 ○家庭学習の質の向上	・指導方法の改善 ・家庭学習の充実 ・ICT利活用教育の推進	・諸学力検査において、通過率を全国平均以上にする。 ・家庭学習の充実を図る。家庭での学習内容を授業の中で生かせるよう工夫する。 ・一時間の授業において、電子黒板、実物投影機などの効果的なICT機器の活用を図る。	・校内研究部会と少人数指導担当(学力向上対策推進担当)との連携を図り、全学年が統一した取組を行えるようにする。 ・学力向上コーディネーターによる調整を行い、全職員が共通理解しながら、学力の向上に努める。 ・家庭学習を授業の中で生かせるような効果的な家庭学習のあり方を探る。また、家庭学習に関する講演会を計画するなど、保護者の啓発活動に努める。 ・ICT機器の活用により、学習意欲を高め、教科の力を高める。また、知識だけにとどまらず、学び方の指導につなげる。	・授業始めと終わりは、今年度も「立腹」に全校で取り組んだ。静かな雰囲気での授業を始めることで落ち着いた学習につなげられた。 ・算数科において、単元計画に「教えて考えさせる授業(習得型学習)」と「問題解決型授業」が「自然」を位置づけた指導を継続して行ってきた。 ・各学年の課題と手立について共通理解し、職員室に掲示したことで、意識付けになった。 ・家庭学習の充実のために、保護者向けのアンケートを配布し、結果を知らせ、保護者の意識向上を図ってきた。	○4年生は、12月の県学習状況調査において、各領域、各観点において県平均を上回ることができた。 ○5年生は、12月の県学習状況調査において、県平均くらい、6年生は、少し下回っていた。基礎的な内容の確実な定着と思考力の向上を図る指導をくり返すことが必要であること全職員で確認した。 ○基礎・基本に力を入れる必要がある学年では、「教えて考えさせる授業」が特に効果的であった。 ○△6月に「家庭学習の約束」を配布し、11月には保護者・児童への家庭学習へのアンケートを実施し、1月に結果を保護者に配布することができた。家庭学習への意識は高まっているが、宿題忘れをする児童が特定しており、宿題の意識について啓発し続けていく必要がある。
教育活動	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	◎教職員全体の働き方改革に関する意識改革に資する具体的な目標を設定する。	・勤務時間の適正化を図る。 ・教職員の勤務時間に対する意識を高める。	・定時退勤日を徹底し、勤務時間を意識した働き方を推進する。 ・学校業務の精査と適正化を図る。 ・業務記録表により勤務実態を把握し、マネジメントを強化する。 ・業務の在り方や見直しについて定期的に話し合い、適正化に寄与する。	・定時退勤日の札をつくり、職員の意識化を図ったことで、早めに退勤する職員が増えたが、授業参観や成績処理の時期は、退勤が遅くなる職員も多かった。 ・業務記録表での勤務実態の把握はできたが、勤務時間が多岐の職員への具体的な手立ちはあまりとれなかった。	○△定時退勤日に対する意識は、だいぶ高まってきたが、実務の取捨選択が難しいようである。 ○全職員に、働き方改革についてのアンケートをとり、次年度の働き方改革伊万里小版の目録を立てることができた。 ○△「学校における働き方改革」についての具体策を考え実践していく。
特定課題	○読書活動の充実	・読書活動の習慣化(学校内及び家庭)	・本校図書室の一人あたり貸出冊数の対前年度比より向上を図る。 ・家庭での読書習慣の定着を図る。	・毎学期、クラスごとの本の貸出し状況を図書館便りでもらって知らせ、保護者への啓発を行う。 ・毎学期読書まつり(1学期『紅色読書週間』、2学期『もみじ読書週間』)を設定し、学校図書館の利用者を増やすようにする。	・学期末に「図書館だより」で各クラスの貸出し状況や多読者の紹介を知らせ、児童や担任、保護者に読書や多読の意識を高めるようにした。 ・1学期に「紅色読書週間」、2学期に「もみじ読書週間」を設けた。読書週間がある月は、毎日2冊の貸出しができるようにしたことで図書館の利用者が増えた。また、図書委員会によるイベント(図書タイムや大型絵本の読み聞かせ)にも多数の児童が参加した。 ・育友会活動(「お話プレゼント」)による読み聞かせを楽しみにしている児童が多く、本に親しむ手立てもなっている。	○年2回の読書週間では、図書委員会によるイベント以外にも、読み聞かせボランティアの「お話プレゼント」の皆さんに協力いただき、プロジェクターを使った絵本の読み聞かせをしていただいた。低学年の児童を中心にたくさん児童がお話を聞きた。 ○児童や教師が読みたい本の希望を取り、購入を行った。また、教科学習に役立つ本を調べ購入をした。 ○図書委員会や司書おすすめの本を季節に応じてテーブル席に置くようにし、様々な本を手に取りやすいようにした。 △多読をすることは良いことだと認め、「1冊プラス券」や「多読賞」を渡しているが、読書の質を上げるための手立てを考えた。 △「静」の時間、朝読書を確実に行うように、共通理解を取り組んでいく。

② 基本的な生活習慣の定着及び不登校児童の解消に努める。						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
教育活動	●心の教育 ●「いじめ」「不登校」への対応	◎心の教育3セツの活用 ・道徳の時間の充実 ・異年齢での共遊・集会活動の充実 ・互いに認め合う集団作り ・いじめの早期発見・早期対応	・年1回以上、全学級で「いのちの教育指導資料」を活用した授業を行い、保護者に公開する。 ・児童の心に響く集会活動の工夫を行う。 ・いじめ防止基本方針」を全職員での共通理解の徹底を図る。 ・アンケートの実施や、きめ細やかな観察により「いじめゼロ」を目指す。	・「ふれあい道徳週間」を設定し、保護者と共に「いのちの授業」を実践し、人としての生き方を考えさせる。 ・心のノートや市作成の「いのちの教育指導資料」を年間指導計画に位置づけ、一層の活用を推進する。 ・児童が互いの良さを認め合えるような学級活動や集会活動の工夫を行う。 ・伊万里小学校いじめ防止基本方針に則り、校務分掌に「いじめ防止委員会」を設置し、いじめ防止の取り組みや、いじめ防止の啓発等を全職員で行う。	・10月の授業参観時、「ふれあい道徳」を行うことができた。 ・異学年集団で活動する朝の時間の「なかよしタイム」は、年間に5回行った。子どもたちの様子のつながりを深め、リーダー作り役立っている。 ・友だちへの悪口や陰口、自分勝手な行動などの行動をとる児童が見られた。一対一で話をするとちゃんと素直に反省することができていた。	○人権集会、ありがとう集会での児童の発表や交流を通して、友だちの良さを認め合える機会を持つことができた。人権集会で、学級での取組を発表したことで、いじめを許さないという意識を高めることができた。 △道徳の教科書が導入されたことで、「道徳ノート」や「命の教育指導資料」を活用する場面が減った。 ○いじめ等の問題行動が起きた場合は、学校組織として早期対応した。認知した全ての事案が解決方向にむかった。次年度も、「早期発見・早期対応」に力を入れていくとともに教育相談を充実していき取組を行う必要がある。
特定課題	◎幼・保・小連携の推進	・各園との情報交換、参観の工夫 ・保護者説明会の充実	・各園保育士との連携を図ることにより、新入学児に関する情報収集に努める。 ・啓成者説明会を充実させ、小学校入学の際に不安を感じる保護者の支援を行う。	・各園との情報交換を密にし、新入児童の特性に合った指導の手立てを検討する。 ・新入学児保護者説明会の際に、保護者に向けた資料の充実を図るとともに、HP、「伊万里小安心安全メール」等による学校情報を十分活用してもらえるように配慮する。	・本校への就学者が多い園には直接訪問し、意見交換を行った。児童の様子を見たり、要観察の園児についての具体的な指導などが聞けた。 ・各園への訪問が日程的に夏季休業中となるため、参観できる園児の数が限られる。 ・新入学説明会では、各担当で内容を分担することにより、具体的に詳しく説明会となった。	○夏季休業中に職員で園訪問を行い、新入学児童に関する情報の収集を行った。また、年度末には、各園の職員との情報交換を行い、新年度の効果的な学級編制や個別の支援の必要な子の支援計画を策定する上での基礎資料を得ることができた。 ○特別支援部の担当も園訪問に同行し、より具体的に支援に必要な園児に関しての意見交換ができた。 ○各園との情報交換では、本校に就学した児童の状況についても報告を行い、幼・保・小の連携を図ることができた。 △年度末に各園との引き継ぎを行ったが、時期的に余裕を持って話し合うことができなかった。短時間で焦点を絞った内容について情報交換を行っていく必要がある。
特定課題	◎小中連携の推進	・健やかな「いまりっ子」の育成	・啓成中学校区3校の職員の課題意識の共有を図る。 ・啓成中学校区3校の児童・生徒の学力の向上、生徒指導の充実を図る。	・啓成中学校区における活用方向上研究指定事業をもとに、3校合同の研修会及び授業研究会を通じて、啓成中学校区の児童生徒の活用力の状況等を把握し、指導に生かすようにする。	・啓成中学校区における活用方向上研究指定事業で共通して取組んできた内容を、今年度も引き続き継続し、各学校独自に深めていった。 ・本校では「授業づくり部」「学習習慣部」「家庭学習部」の三部がそれぞれ深い研究を行い、精進しあって児童の算数科に取組む意欲や学力を高めた。	○今年度も三校がそれぞれの授業研究会を一人1回は参観し、啓中や牧島小の研究を知り、児童の学習の様子を把握するようになった。 ○3校合い言葉については、基本的な事項であり、「授業づくり部」や「学習習慣部」の取組として授業の中で指導することができ、定着も良くなってきている。 △合同の研修会を予定していたが中止となり、学力向上面や生徒指導面での情報交換が少なかった。
特定課題	○不登校の未然防止 ○教育相談の充実	・教育相談活動の充実	・教育相談活動を充実させ、児童一人一人の心の状況の把握に努める。	・生活アンケート等を実施することにより、児童の心の悩みを十分把握できるようにする。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど関係機関と十分に連携を取り、保護者への相談活動の充実を図る。 ・「楽しい学校作りにより「楽しい学校作り」を行い、不登校の未然防止につなげる。	・生活アンケートや家庭連絡や児童との相談などにより、その都度対応をすることができた。 ・SCやSSWなど関係機関との連携を取った。特に適応教室との連携をとることができた。 ・「楽しい学校を創ろう」「頑張った人が認められる学校を創ろう」の合い言葉のもと、学校が楽しく安心できる居場所となるように取り組んだ。	○連絡会等で気になる児童についての情報や対策等について共有し、学校全体で支援体制をとるよう共通理解した。 ○不登校傾向の児童へ、家庭訪問や電話連絡、保護者との面談や適応教室との連携を十分に図ることができた。 ○SCや専門機関との連携により、保護者や児童との面談を行うことができ、学校と家庭との連携がとれた。 △年度当初から不登校傾向児童との信頼関係づくりを行うことの重要である。また、保護者との連携を密に図り、園にに応じた支援(約束事など)をしっかりと立てることが必要である。

本年度の重点目標の評価項目として含まれていない共通評価項目がある場合に記入する。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
教育活動	●健康・体づくり	◎食育の充実 ・運動習慣の改善や定着化 ・望ましい食習慣の形成 ・性教育指導の充実	・外遊びをよびかけ、運動場で毎日遊ぼうという児童70%以上をめざす。 ・性教育の推進については、関係機関との連携を図りながら、計画的な取組を行う。	・保健部を中心に、昼休みの外遊びの励行を行う。 ・水泳・持久走など校内の体育行事に向けた取組の充実を図る。 ・育友会との連携により、啓成中学校区共通の重点取組である「挨拶運動」を推進し、基本的な生活習慣の定着及び保護者への啓発を行う。 ・養護教諭を中心として、関係機関と連携し、より効果的な学習教材の選定を行うとともに、年間計画に位置づけ計画的な指導を行う。	・昼休みの遊びについては、晴れた日はよく外遊びができていた。 ・担任の先生の協力があり、校内の体育行事に向けては、多くの児童が参加した。 ・育友会との連携により、毎月第3週の「挨拶運動」は、行うことができた。毎日立れをする児童もいて、よい手本となっていた。 ・性教育の指導については、養護教諭を中心として教材を選定し、各学年で実施することができた。	○外遊びはよくできているが、帽子着用や休み後の手洗いについても徹底させたい。 ○持久走大会前には、「ジョギングタイム」を昼休みの終わり5分に設定し、多くの児童が参加できていた。 ○育友会との挨拶運動では、保護者の率先した協力があり、毎月行うことができた。 △「外に遊びに出ない児童」や「体育行事へ参加しない児童」は、ほほま決まっている。このような児童を減らし、運動に対し、意欲をもっと持てる児童を増やしたい。
学校運営	○学校教育目標の普及及び開かれた学校づくり	・本年度の重点目標の周知 ・開かれた学校づくりの推進	・児童、保護者に周知し、認知度を80%以上にする。 ・授業参観の参観率を保護者85%以上にする。 ・「学校の様子がよく分かる」という保護者を90%以上になるようにする。	・年度当初に学校ホームページ上に公開し、広く周知を図る。 ・学校ホームページの充実を図り、行事写真や児童の活動などを広く公開する。 ・学校行事等の案内を、学校のHPや「安心安全メール」などを用いて、早めに保護者にお知らせする。 ・学校だよりや学年・学級懇談会等で周知徹底し、具体的取り組みを説明する。	・教育目標の周知についての保護者アンケート結果では、昨年度対比0.1ポイント上がり、お便りや会議で話してきたことの効果だと思われる。 ・授業参観や育友会総会の出席率についても、昨年度より参加率が向上し、ほぼ目標を達成することができた。 ・学校便りや学年・学級通信等で、十分に情報発信ができた。「学校の様子がよく分かる」と回答した保護者は、今年度も約95%と多かった。	○学校評価結果では、「学校は、行事や学習の様子について分かりやすく知らせている。」の設問に対して9割以上の保護者が、回答する。 ○「家庭で行事や学習のことを子どもと話している」という保護者が9割以上いて、家庭での会話が多いことがわかる。 ○△授業参観の出席率については、昨年度より向上したが、授業参観後の懇談会の出席については、昨年より増えているものの、また更なる改善案を検討していく必要がある。
学校運営	◎危機管理	◎通学路の安全点検及び安全指導 ◎食物アレルギー等への対応	・通学路の安全点検を定期的に行う。 ・安心できる学校づくりに努力する。 ・避難訓練、防犯教室、交通安全教室をそれぞれ2年2回実施する。 ・原子力、地震等の災害時の避難訓練を行う。 ・児童のアレルギーの把握を確実にを行う。	・職員の危機管理意識を高めるために「報・連・相」の徹底を図り、学年主任との連携を深める。 ・学校行事等の予想される危険を把握し、より具体的な対応ができるように意識化を図る。 ・伊万里地区子ども見守り隊及び育友会の防犯活動との連携を強化する。 ・家庭調査等でアレルギーやぜんそく、てんかんの把握を確実にし、全職員で共通理解をし、給食や体育で担任以外が指導をしている場合でも配慮ができるようにする。	・食物アレルギーによるアナフィラキシーショック等の症状が出た場合の対応について、実践的研修を行うことができた。 ・危機管理マニュアル等を利用して、職員への意識化を図るとともに、児童の安全、職員の規範正に保つ具体的な資料を提示し、危機管理意識の向上に努めた。 ・防犯教室等の実施については、予定どおり実施することができた。 ・アレルギーの把握については、学期始めに調査を行い、職員全体で共通理解をした。	○児童の安全に係る各種通知、資料等については、職員会議や職員連絡会等を活用して、職員間で情報を共有したり、外部から講師を招いて研修会を開いたりして、指導の徹底を行うようにした。また、インフルエンザ情報や感染症胃腸炎、コロナウイルス拡大防止策など必要な情報については、安心安全メールや文書等により、保護者への情報提供も行った。 ○地域の見守り隊との連携については、毎月、1ヶ月分の下校時刻を公民館に伝え、その時間に横断歩道等に立っていただいた。学校としても、見守り隊の方との対面式を行い、感謝の気持ちを伝えることができた。 ○△食物アレルギー対応については、年度当初にしっかりと共通理解を行ったが、学期1回は、共通理解の場をもつなどして、意識を継続していく必要がある。
特定課題	○特別支援教育	・特別支援教育の充実	・支援を要する児童について、個別の教育支援計画を作成し、一人一人のニーズに応じた適切な指導及び支援を行う。	・年度当初に個別の教育支援計画を作成し、当該児童の指導・支援を行う。 ・毎週、支援の実態や状況について適宜職員間で情報交換を行い、必要な手立てや支援策を検討する。 ・必要に応じて支援委員会を開催し、当該児童の現状把握と、望ましい支援の在り方について情報交換を行う。	・個別の教育支援計画作成についての研修を行い、支援を要する児童について個別の教育支援計画を作成し、管理職の点検を受けた。また、学期ごとに評価を行った。 ・学年ごとの支援会議で、支援の必要な児童についての情報把握を行った。 ・特別支援教育委員との情報交換の場を設定し、情報収集や対策等について話し合ったが、配慮を要する適切な支援ができない場合もあった。 ・連絡会の前は、気になる子についての情報交換を行って、その支援について、具体的に話し合う時間を設けることができなかった。	○個別の教育支援計画を確実に作成し、評価を行ったことで、担任が具体的な支援内容について考える機会を設けることができた。また、次年度への継続的な支援とつながると考える。 ○学年ごとの支援会議で、情報収集を行ったことで、適切な就学支援に結び付けるとともに、学年間で共通理解することができた。 △配慮を要する児童についての適切な支援を行うために、特別支援教育委員との、打ち合わせの時間を確保し、必要な支援について具体的に話し合う。 △情報収集だけに終わらず、職員のだれがどんな支援を行うか、具体的に考える時間を設ける必要がある。

●は佐賀県教育委員会共通評価項目、◎は伊万里市教育委員会共通評価項目、○は伊万里小学校独自評価項目。

7 来年度の改善策

- ・「響け 伊小の会」の活動をさらに活性化させ、地域との連携を強化し、地域と一緒になって児童を育てていくようにする。
- ・学校評価の結果、学校の教育目標の認知度があまり高くないので、様々な場面で発信していくなど、周知方法等を工夫すること、児童、保護者、地域の方、教職員が教育目標に向かって意識しながら活動できるようにしていく。
- ・不登校傾向(登校しぶりなど)を示す児童への対応については担任だけでなく、教員等の職員、さらに、校内における支援体制を強化したり、学校だけでは難しい面があるのを、関係機関(SC、SSW、市保健課等)との連携を深めたりしていく。
- ・いじめなど、心が傷ついたり心や身体を傷つける児童が出ないよう、予防に最大限力を注ぐとともに、気になる言動等があった場合は、担任だけでなく、早めに対応していく。
- ・保護者からのアンケート結果より、「きちんと朝食をとっているか」「宿題に目をつけているか」「挨拶についての指導」等が昨年度より良くなっていったので、家庭教育での役割等について育友会と連携しながら啓発していく。
- ・働き方改革について、具体策を講じ、よりよい職場づくりを目指す。